

年間第 31 主日 10 月 31 日 分かち合い

マルコ 12-28b～34

イエスは生涯の終わりが近づくとエルサレムに上り、神殿の境内で、時の宗教指導者たちから様々なテーマで質問を受けられた。イエスの教えの信憑性を確かめようとしたり、イエスに罾をかけようとしたりするものが少なくなかった。イエスはその一つ一つに丁寧に答えたり、逆に彼らに問いかけたりされた。

今日の箇所は、その終わりの部分、有名な二つの掟、「神への愛」と「隣人への愛」についての箇所である。キリスト者にとって、これは、最も基本的な、当たり前のような掟。しかし、よく考えてみれば、決して当たり前ではなく、自明のことでもない。どうして、その姿を見ることが、声を聞くことも、触れることもできない神を愛することができるのか。多くの宗教にとって、神は遠く近づくことのゆるされない恐るべき存在として、祈りや犠牲をささげ、恐れ敬い、その加護を願う存在だった。しかし、イスラエルの民は、その初めから、それと異なる神について教えられた。旧約聖書は、イスラエルの歴史について多くの頁をさいているが、それは単なる歴史の書ではなく、むしろ、一貫して、神がどのような方であるか、神は人間に何を語られたかを記した文書である。イエスラエルは、長い年月をかけて、神がいかなる存在であるか、他の民族が祭る神とどう違うかを教えられた。その要となるのは、彼らが貴重な遺産として伝えた「十戒」であり、数世紀後、それに加えられた申命記の中の掟である。そこに現れる神は、決して、遠くであって、近づくことも、声を聞くこともできない存在ではなく、むしろ、近くにおられ、人々に語りかける存在、人々が全身全霊をもって愛すべき存在である、ということである。十戒の中で、「あなたは、わたしのほかに神があってはならない」とやや硬い表現で示された神は、申命記の中で「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして愛しなさい」、と、よほど近い存在として語られるようになる。そして、イスラエルの人々は、申命記の教えを守り、この言葉を心に刻むだけでなく、「自分の手に結び、額に付け、戸口の柱にも門にも書き記し」てきた。さらに、この言葉を、世紀を超えて、日に数回繰り返して唱えることを続けてきた。

彼らが、神は愛すべき方であると教えられたのは、十戒や申命記の教え、それを解説する祭司や預言者の言葉を通してだけではなく、神ご自身が先祖たちの人生の中で、また、イエスラエルの歴史の中で示された、その力、優れた知恵、さらには、特別な愛によってである。イスラエルは、どの民族、宗教よりも、生ける神について、その人間に対する愛について深く教えられた民である。

しかし、それで十分ではなかった。人々の心は弱く、神から離れ、神ならぬものを神であるかのように大事にし、神の御心を踏みにじった。そこで神は、人々が神の心、

神の愛を一層深く悟るために、その御独り子をこの世に送ることを決意された。人となられた神の子、イエス・キリストは、まさに、神の愛を人々に示す使命を帯びて、人々の世界に生きられた。それは、ただ、人々が一層の熱心をもって神を愛するためだけではなく、神から愛されている人間を、同じ愛で愛することを教えるためだった。「隣人を自分のように愛しなさい」という掟は、旧約聖書のレビ記に記されている。しかし、多くの掟の中に刻まれた隣人への愛を定めた掟は、人々の心に根を下ろすには至らなかった。

人となられた神の子、イエスは、自ら人として、弱く、罪深く、自分中心な人間、特に、人々が忘れ、無視しがちな小さな、貧しい人を、神の愛を持って愛することによって、さらには、そうした人間のために自らの命までも捧げることによって、「隣人を自分のように愛する」とはどういうことなのか、悟らせようとなさったのである。

神を愛する心は、神の愛を悟ったものにはじめて与えられる恵みである。隣人を自分のように愛する心も、神の愛を知ったものに注がれる賜物である。愛が掟と定められているのは、それこそが命に至る道であり、それ以外に、神の国に至る道がないことを教えるためと思われる。あたかも、人間の努力がすべてであるような人間社会の中で、神の愛に気づき、恵みとしての神の愛を生きることができるよう、共に祈ろう。
(S.T.)